

西日本方言における引用標識ゼロ化の定量分析

— 生起頻度と言語内的要因の方言間異同 —

小 西 いずみ

(2010年10月7日受理)

A Quantitative Analysis on Zero-marking of the Quotative Marker in West Japanese Dialects:
Its Frequency and Internal Linguistic Factors

Izumi Konishi

Abstract: In some west Japanese dialects, the quotative marker (e.g. *-to*) can be omitted in the environment that the verb *iu* “say” or *omou* “think” directly follows the quotative phrase. This paper analyzes this phenomenon quantitatively, using corpuses of dialect conversation. As a result of analysis, we found that the frequency of the zero-marking is higher in South-Hyogo, Okayama, and Hiroshima than other areas. Furthermore, we confirm that the frequency is higher in the environment that be followed the verb *iu* than the verb *omou*, and higher when *-to iu* means “say that” than when it means “call something a particular name”, or when it becomes a compound functional expression. These internal linguistic factors are found commonly among areally discontinuous dialects. Therefore we come to the conclusion that the frequency of the zero-marking becomes higher when the functional load of the quotative marker is lighter.

Key words: quotative marker, zero particle, west Japanese dialect

キーワード：引用標識，助詞のゼロ化，西日本方言

1. 本稿の目的と概要

西日本の一部の方言では、「行コー ユータ（行こうと言った）」などのように、引用標識（共通語の助詞「と」「って」等）が ϕ （ゼロ）となる現象（いわゆる「ト抜け」「トの脱落」）が起こることが知られている。本稿ではこの現象を「引用標識の ϕ 化」と呼び、その頻度と言語内的要因の定量分析を行う。

引用標識の ϕ 化が起こる地域の範囲は、『方言文法全国地図』（国立国語研究所1989, 2002）などで知ることができるが、 ϕ 化の頻度の地域差を知る資料はない。また、 ϕ 化の言語内的要因についても先行研究の指摘があるが、その地域間の異同は十分に明らかでない。そこで本稿では、引用標識の ϕ 化が起こる西日本方言域（北陸・近畿・中四国）の方言を対象と

し、談話資料の用例調査に基づいて、 ϕ 化の頻度とそれに関わる言語内的要因について分析する。また、本稿の最後で、その言語内的要因の動機について、主に引用標識の機能負担という観点から考察する。

2. 先行研究

2-1. 引用標識の全国分布

引用標識の全国分布を知る資料として、『方言文法全国地図』（GAJ）第32図「田中という人」、同第233図「行こうと思っている」がある（国立国語研究所1989, 2002）。前者の略図を図1に示す。 ϕ は、近畿から中四国にかけて連続して分布するほか、北陸の富山県などにも分布することが分かる¹⁾。第233図でも ϕ の分布域はほぼ同じである。



図1 GAJ 第32図略図「田中という人」

2-2. φ化に関わる言語内的要因

φ化に関わる言語内的要因として、先行研究では次のことが指摘されている。

(I) φ化の生起制限 (必要条件)

φ化が起こるのは、引用句(引用内容+引用標識。

以下「～と」と表記することがある)を承ける動詞が「言う」か「思う」で、かつ、引用句に「言う」「思う」が直接後続する場合である。「～とは言っていない」「～と私は思った」のように、助詞や他の成分が介在する環境では不可となる。ただし、大阪方言では「言う」の敬語動詞「おっしゃる」「申す」でも可能なことが指摘されている。

(II) φ化の定量的要因

- (a) 「言う」と「思う」：前者のほうがφ化しやすい。
- (b) 「～と言う」の複合辞化(文法化)の度合い：「言う」の(発話する)という語彙の意味が稀薄化し、「田中という人」「広島といえば広島だ」のように「～と言う」が複合辞化した用法はφ化しにくい。

(I)は、前田(1977)の大阪方言資料(落語と谷崎潤一郎「卍」)の用例調査、高永(1983,1996)の広島県宮島町方言の自発的談話の用例調査、井上(2003)の富山県井波町方言の内省による記述などで指摘されている。富山市方言話者である筆者の内省もこれに合致する²⁾。

なお、福田(2000)は、広島方言で「おまえ、花子がきれいじゃφ先生に言ったろうが」のような別の語句が介在する文でのφ化を可とするが、筆者が広島県広島市・三次市の方言話者数名に確認したところ不可と判断された。また、高永(同前)の談話資料では「聞く」でも脱落例が1例あったとするが、これも広島県内方言話者の内省では不可とされることから、談話において臨時・例外的に出現したものと思われる。

φ化は(I)の条件に合致する場合も義務的ではなく、その生起頻度は(II)の要因に左右される。うち(a)は、前田(1977)が大阪方言、高永(1983,1996)が広島県宮島町方言に関して、(b)は、朝日(2008)が神戸市西区の伝統的集落とニュータウンでそれぞれ収録した自発的談話の用例調査結果に基づいて指摘したものである³⁾。

表1 調査対象とした談話資料

談話ID	地点	収録年	話者の生年	出典 [†]
富山県				
T1	氷見市飯久保	1956	1887-1895	N3
T2	下新川郡入善町小摺戸	1956	1880-1896	N3
T3	東砺波郡平村上梨	1956	1885-1888	N8
T4	砺波市鷹栖	1981	1898-1907	K10
京都府				
Ky1	京都市	1953	1895-1901	N4
Ky2	京都市中京区	1983	1904-1934	K11
大阪府				
Os1	大阪市	1953	1888-1898	N4
Os2	大阪市東区	1977	1898-1914	K13
兵庫県				
Hy1	神崎郡神崎町粟賀	1958	1885-1889	N4
Hy2	城崎郡城崎町飯谷	1958	1872-1882	N4
Hy3	相生市相生	1985	1911-1914	K13
岡山県				
Ok1	真庭郡勝山町神代	1955	1876-1900	N5
Ok2	小田郡矢掛町内田	1979	1918-1919	K14
広島県				
Hr1	佐伯郡水内村	1955	1885-1895	N5
Hr2	庄原市山内町	1955	1895-1898	N5
Hr3	広島市古江東町	1977	1899-1912	K15
愛媛県				
E1	温泉郡川内村川内	1956	1887-1905	N5
E2	北宇和郡津島町	1956	1890-1896	N5
E3	松山市久谷町奥久谷	1981	1903-1914	K17
高知県				
Kc1	香美郡美良布町	1956	1871-1903	N5
Kc2	幡多郡大方町	1956	1892-1900	N5
Kc3	幡多郡大月町竜ヶ迫	1962	1886-1894	N8
Kc4	高知市領家、針原	1977	1907-1936	K17

† 資料略称と収録巻数

3. 調査方法

GAJを見ると、引用標識 ϕ の地点の分布密度には地域差がある。GAJの第32図・第233図は前節(Ⅱ)の ϕ 化が起こりにくい場合に該当しており、そのことが ϕ の分布密度に関与していると考えられる。また、(Ⅱ)の要因が ϕ 化の起こるどの地域でも等しく関与するのかが、先行研究では十分に明らかでない。そこで、本稿では、 ϕ 化しうる地域の方言談話文字化資料を用い、引用標識の用例を採集、その定量分析を行う。

調査対象資料として次の二つを用いる。これらは、全国規模の方言談話収集事業において、ある程度統一した方針のもとに一定期間内に収集された方言談話の集成であり、地域間比較にも適している。

- 『全国方言資料』(日本放送協会編1999)【N】
- 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(国立国語研究所編2001-2007)【K】

【 】内は略称

今回の調査では、GAJで ϕ が分布する富山・京都・大阪・兵庫・岡山・広島・愛媛・高知の府県内で収録された談話を対象資料とする⁴⁾。表1に各談話の話者等の情報を示す。地点名は原資料の記載に従う。各資料において調査地点方言の話者でない調査者・司会者の発話は対象外とした。また、音声データを確認し、不明瞭な例を除外したり、異なる形式と認定した場合がある。

4. 調査結果と分析

4-1. 引用標識のバリエーションとアクセント特徴

談話資料における引用標識のバリエーションとそれぞれの用例数・使用率を表2と図2に示す。ここでは ϕ 化しえない環境も含めた全引用標識を対象とする。

引用標識のバリエーションは次のとおりである⁵⁾。

◆ ϕ

(1) ヒトナカエ デルンジャケン ϕ オモテ ジュンジュンニ キレーニ シテキヨル ϕ ユータ。(人中へ出るのだからと思っ、順々にきれいにしてきていると言った。)[E3]

(2) コガーナ クロイ ユノタマ ϕ ユノガ(こんな黒い湯の玉とというのが)[Hr1]

ϕ と認定したのは、上述の ϕ 化の必要条件(Ⅰ)に該当するものだけである。次のとおり、京都と大阪の資料では謙譲語「申す」を述語動詞とする例も確認できた。

(3) ショーガネーナー ϕ モーシテオリマスヨナコトデ(「しょうがないよね」と申しておりますよなことで。)[Ky1]

(4) ワタシモネ ワテ ϕ モーシマスネン。(私もね「ワテ」と申しますの。)[Os2]

◆ト

述語が「思う」の例が多い。

(5) ホントニ イマノシューワー ダークナ コツチャナー ϕ ト モーテ(本当に今の衆は楽なことだなと思っ)[T1]

◆(ツ)テ

これを承ける動詞の多くは「言う」で、「思う」は1例(Ky2)、ほかに「ある」「歌う」などもある。促音挿入形「ツテ」と非挿入形「テ」の選択には地域差や何らかの言語内的要因が関与すると思われるが、ここでは両者を区別しない。

(6) オーサカベン ナニガ ワルイネン テ ヨーユータコト アリマスケドネー。(「大阪弁で何が悪いんだ」とよく言ったことがありますけどね。)[Os2]

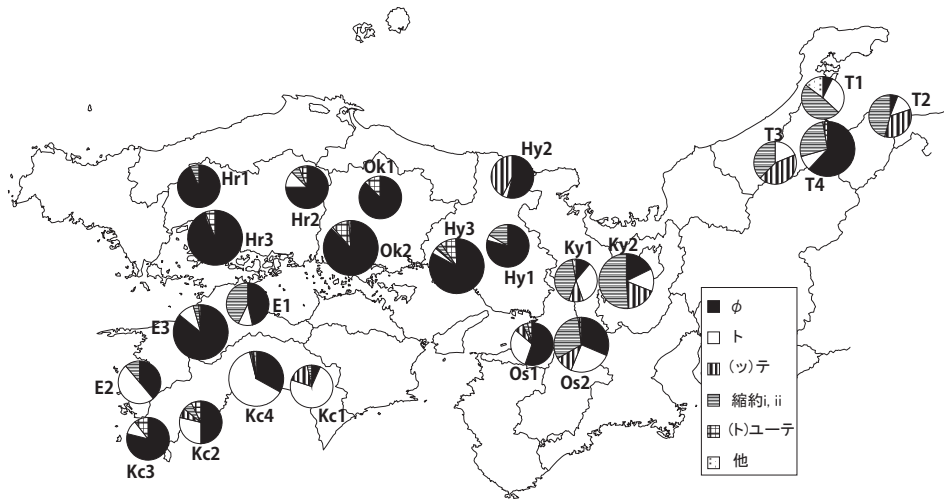


図2 引用標識の使用率

表2 引用標識の用例数・使用率

	φ	%	ト	%	(ツ)テ	%	縮約i	%	縮約ii	%	(ト)ユーテ	%	他	%	計
T1	2	7.4	8	29.6	0	0.0	11	40.7	2	7.4	0	0.0	4	14.8	27
T2	2	5.7	5	14.3	12	34.3	10	28.6	6	17.1	0	0.0	0	0.0	35
T3	0	0.0	3	20.0	6	40.0	0	0.0	6	40.0	0	0.0	0	0.0	15
T4	44	62.0	6	8.5	0	0.0	19	26.8	0	0.0	2	2.8	0	0.0	71
Ky1	4	11.4	12	34.3	3	8.6	12	34.3	4	11.4	0	0.0	0	0.0	35
Ky2	9	20.0	5	11.1	8	17.8	15	33.3	8	17.8	0	0.0	0	0.0	45
Os1	16	55.2	9	31.0	2	6.9	1	3.4	0	0.0	1	3.4	0	0.0	29
Os2	51	31.5	40	24.7	17	10.5	48	29.6	3	1.9	3	1.9	0	0.0	162
Hy1	19	79.2	1	4.2	0	0.0	4	16.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	24
Hy2	14	53.8	1	3.8	11	42.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	26
Hy3	121	84.0	5	3.5	1	0.7	3	2.1	2	1.4	11	7.6	1	0.7	144
Ok1	14	87.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	12.5	0	0.0	16
Ok2	84	87.5	1	1.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0	10	10.4	0	0.0	96
Hr1	14	93.3	0	0.0	0	0.0	1	6.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	15
Hr2	12	75.0	2	12.5	0	0.0	1	6.3	0	0.0	1	6.3	0	0.0	16
Hr3	66	93.0	0	0.0	1	1.4	0	0.0	0	0.0	4	5.6	0	0.0	71
E1	13	46.4	3	10.7	0	0.0	11	39.3	1	3.6	0	0.0	0	0.0	28
E2	7	38.9	9	50.0	0	0.0	0	0.0	2	11.1	0	0.0	0	0.0	18
E3	78	85.7	9	9.9	0	0.0	1	1.1	2	2.2	1	1.1	0	0.0	91
Kc1	2	6.7	22	73.3	5	16.7	0	0.0	1	3.3	0	0.0	0	0.0	30
Kc2	14	50.0	8	28.6	2	7.1	1	3.6	1	3.6	2	7.1	0	0.0	28
Kc3	15	78.9	2	10.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	10.5	0	0.0	19
Kc4	50	33.1	95	62.9	2	1.3	0	0.0	1	0.7	3	2.0	0	0.0	151

(7) ヨリアイニ デナハレヨウツテ ヤメカンナラ
ン(「寄り合いに 出なさいよ」とわめかなければ
ならない。)[Hy2]

◆縮約 i

有形の引用標識ト等と「言う」が縮約したもので、「言
う」の語形・活用を保ったもの。

(8) ソレオ ミズテン チュイマンネン。(それを「ミ
ズテン」と言うんですよ。)[Os2]

(9) ワカガエルツツ コトモ ナイケンドーノー(若

返るということもないけれどねえ。)[Kc2]

◆縮約 ii

有形の引用標識ト等と「言う」の縮約したもので、「言
う」の語形が保たれていない、下のような例。

(10) セローリテテネア(競争織りといってね。)[T2]

(11) ニッチョーノ ヤスミテナ コト アラヘン
ドッサカイナー(日曜の休みというようなこと
はないのですからね。)[Ky1]

(12) カエテー モノガ(飼料というものが)[E2]

◆ (ト) ユーテ

「ユーテ」と「トユーテ」がある（後者は Kc4 の 2 例のみ⁶⁾。短音化した「ユテ」も含む。「引用標識 ϕ / ト + 「言う」テ形」に由来し、全体で引用標識化したものと思われる。ここでは、下の (13) (14) のように「と言 ϕ て」と共通語訳できない場合のみ (ト) ユーテを引用標識とみなし、(15) (16) のように「と言 ϕ て」と共通語訳できる例は引用標識 (ϕ ・ト) に動詞「言う」テ形が続いたものとみなす。

- (13) サー アラッチャネー キメヨコ° スユーテ キートレド タベタコトナイカ°。(さあ、私はねえ、「キメヨゴシ」と／ \times と言 ϕ て) 聞いてはいるけれど食べた事はないの。)[T4]
- (14) コドモシュー チョット イッテコーイ ユーテ ユータラ(「子供衆、ちょっと行って来い」と／ \times と言 ϕ て) 言ったら。)[Os2]
- (15) ホデ アノー、ドッチカ° イチバンヤ ニバンヤ ϕ ユテ キメタリネー(それで、あの、どっちが 1 番だとか 2 番だと言 ϕ て決めたりねえ。)[Hy3]
- (16) ヤゲン ϕ ユーテ コーユー フーニ ナツテ マンマルイノデ マンナカイ シンボガアルノ(薬研と言 ϕ て、こういうふうになって、まん丸いのでまん中に心棒があるのを。)[Hr3]

◆ 他

T1 に (17) のような「テ(ッ)テ」4 例、Hy3 に (18) の「オモテ」1 例があった⁷⁾。

- (17) マタ ジキニ カツテクレテイテイ イワツシャルモンナラト モテ(またすぐに(米を)搗いてくれとおっしゃるものならと思って)[T1]
- (18) ムカシデモ オンナジコト シヨツタナ ϕ オモーテ ウチラ オモウワ ンー。(昔でも同じことをしていたなと私たちは思うわ、うん。)[Hy3]

ここで、 ϕ も含めた引用標識のアクセントに触れておく。富山市方言話者としての筆者の内省では、引用標識「ト」「ッテ」「ユーテ」は全て「低接」(前節語句が有核の場合はそのまま低く、無核の場合は低く下がって付く)というアクセント特徴を持つ。 ϕ 化した場合も、引用句後のピッチの下降は実現する。

- (19) a. ミッ[カ]ト オモ ϕ タ。(三日と思った。)
b. ミッ[カ]ッテ ユー ϕ タ。(三日と言 ϕ った。)
c. ミッ[カ]ユー ϕ テ ユー ϕ タ。(同)
d. ミッ[カ] ϕ ユー ϕ タ。(同)

([: 上昇位置,] : 下降位置, ミッカは無核)

つまり、 ϕ 化した場合、離散音上は無形だが、有形のトなどと同様に「低接」という韻律特徴は保たれる。そのため、前接語が無核の体言の場合、その韻律

から、主格名詞句か引用句かが区別できる。

(20) a. ダ[レ ユ]ー ϕ タ。(誰が言 ϕ った。)[主格]

b. ダ[レ] ユー ϕ タ。(「誰」と言 ϕ った。)[引用]

引用標識が ϕ 化しても「低接」というアクセント特徴を保つことは、富山市方言の他の話者 (1922 年生まれ・男性 1 名, 1945 年生まれ・男性 1 名), 広島県三次市方言 (1936 年生まれ, 男性 1 名) でも確認できた。(21) は三次市方言話者より得た例文である。

(21) アガーナ[ヤ]ツア イ[シャ] ϕ ユエ ϕ ン。(あんな奴は医者と言 ϕ えない。注: イシャは無核)

4-2. ϕ 化の頻度の地域差

表 2 と図 2 から、 ϕ 化率が高いのは特に兵庫県南部から岡山県・広島県にかけての本州瀬戸内海沿岸であることが分かる。また、近畿では京都市より大阪市で高く、愛媛県では瀬戸内海に面した E3 が E1・E2 より高い。 ϕ 化率は、近畿から中四国にかけての地域で連続的・移行的な分布を見せると言える。なお、高知県では、東部より西部で ϕ 化率が高い傾向もある。

近畿・中四国地域と地理的に連続しない富山県では、『全国方言資料』の 3 地点よりも、『全国方言談話データベース』の T4 で ϕ 化率が高い。前者のほうが収録時期・話者の生年が早いことに加え、後者が平野部(砺波市)の市街地に位置し、前者 3 地点は経済・文化的な中心地から離れた地域という違いもある。富山県内の ϕ 化は比較的新しく平野部に広まった現象のようにも思えるが、現在のデータでは判然としない。

今回の談話資料の結果と GAJ を対照してみると、 ϕ 化率が高い地域では GAJ で ϕ の回答密度が高く、 ϕ 化率が低い地域では GAJ で ϕ の回答密度が低いという相関関係が見られる。

4-3. ϕ 化の頻度に関わる言語内の要因

次に ϕ 化の頻度に関わる言語内の要因について検討する。T3 は ϕ の例がないので、以下の分析から除く。

(a) 動詞「言う」と「思う」

表 3 に、 ϕ 化の必要条件 (I) を満たす引用標識の例のみを対象とし、引用標識「 ϕ 」[有形 (= ϕ 以外)] と引用句を承ける動詞「言う」「思う」の別に用例数を示した。この表から、「思う」より「言う」で ϕ 化率が高い地点が多いことが分かる。この傾向が有意か否かを確認するため、表 3 の 2 × 2 分割表に対し独立性の検定 (フィッシャーの直接確率検定法による両側検定⁸⁾) を行なったところ、T4, Os1, E3 で 1% 水準、E2 で 5% 水準の有意差が得られた。北陸・近畿・四国という地理的に連続しない地点において、「言う」/「思う」という同じ要因が、 ϕ 化の頻度に関わることが確認できた。

今回の結果では、全体に ϕ 化率が高い兵庫・岡山・

表3 引用標識「φ」「有形」×動詞「言う」「思う」

	φ 有形	計	φ%		φ 有形	計	φ%		φ 有形	計	φ%		φ 有形	計	φ%		
T1	言う	2	17	19	10.5	Os2	言う	51	73	124	41.1	Hr1	言う	11	1	12	91.7
	思う	0	7	7	0.0		思う	0	3	3	0.0		思う	3	0	3	100.0
	計	2	24	26	7.7		計	51	76	127	40.2		計	14	1	15	93.3
T2	言う	2	22	24	8.3	Hy1	言う	13	4	17	76.5	Hr2	言う	9	1	10	90.0
	思う	0	1	1	0.0		思う	6	0	6	100.0		思う	3	2	5	60.0
	計	2	23	25	8.0		計	19	4	23	82.6		計	12	3	15	80.0
T4	言う	44	21	65	67.7	Hy2	言う	9	4	13	69.2	Hr3	言う	61	4	65	93.8
	思う	0	5	5	0.0		思う	5	1	6	83.3		思う	5	0	5	100.0
	計	44	26	70	62.9		計	14	5	19	73.7		計	66	4	70	94.3
Ky1	言う	2	21	23	8.7	Hy3	言う	106	12	118	89.8	E1	言う	11	12	23	47.8
	思う	2	9	11	18.2		思う	15	0	15	100.0		思う	2	2	4	50.0
	計	4	30	34	11.8		計	121	12	133	91.0		計	13	14	27	48.1
Ky2	言う	9	31	40	22.5	Ok1	言う	14	1	15	93.3	E2	言う	7	5	12	58.3
	思う	0	4	4	0.0		思う	0	0	0	-		思う	0	6	6	0.0
	計	9	35	44	20.5		計	14	1	15	93.3		計	7	11	18	38.9
Os1	言う	15	2	17	88.2	Ok2	言う	72	7	79	91.1	E3	言う	76	7	83	91.6
	思う	1	7	8	12.5		思う	12	0	12	100.0		思う	2	5	7	28.6
	計	16	9	25	64.0		計	84	7	91	92.3		計	78	12	90	86.7

広島ではこの要因が効いていない。ただし、高永(1996)の広島県宮島町の自然談話データでは、φ化率が「言う」で65.7%、「思う」で20.6%と差があったという。高永の自然談話データには調査者によるインタビューでの発話も含まれている。くだけたスタイルでは全体にφ化率が高く、要因(a)が効いてこない広島においても、改まった(あるいは標準語志向の)スタイルでは要因(a)が効いてφ化率が下がるのであろう。

(b) 「～と言う」の意味・複合辞化

前述のとおり、朝日(2008)は、神戸市の談話データから、述語動詞「言う」が発話動詞としての性質を失い、引用標識とともに複合辞化した用法ではφ化しにくいことを指摘した。本稿では、朝日の指摘をふまえた上で、「言う」の語彙的意味の多義性にも留意し、「～と言う」の例を次の5種に分類・集計した。

①発話の引用

「Xと言う」が〈Xが発話する〉という意味を表す場合。つまりX部分が発話内容を示し、「言う」が〈発話する〉という語彙的意味を持つ。典型的には下の(22)や前掲(14)のように特定の主体による一回的事態としての発話を引用する。

(22) さっき太郎が「疲れたなあ」と言った。[作例]

典型から外れるものとして、下の(23)(24)や前掲(6)(15)のように、発話時点ないし発話主体が不特定で、特定の状況において発話内容が慣習化された例も含む。

(23) ホイデ モー ドンナイ シテモ ネムタカッタラ チョト イネ ツマシテモラオφユーテナー イマダニ ワタシナー アノ イネ ツムφユーテ ミナニ ワラワレヤンネンケドモナ (そして、もうどんなにしても眠かったら、

ちょっと「稲を摘ませてもらおう」と言ってね。今でも私はね「稲を摘む」と言って、みんなに笑われますのですけれどもね。)[Os1]

(24) オーサカ マツノウチヤ ジューゴンチマデ φイーマスケドナ (大阪は、松の内は15日までと言いますけどね。)[Os1]

これらは、発話の個別具体性や再現性に欠けるが、音声言語として表現された内容を引用するという点で〈発話する〉という語義を保っているとみなした。(23)の2例は〈(眠い時は慣習として)「稲を摘む」と言う=発話する〉と解釈してここに分類したが、これが「寝る」ことを「稲を摘む」と言う=表現する」という構文ととれば次の②の例となる。(24)は、藤田(2000: 116-117)が「ある地域・分野・集団などの共有物である共通認識や諺・格言などを実物表示して揭示・紹介する表現」としたものに当たる。

次のように擬音語を受ける例もわずかに見られた。この類の例は〈Xと音を発する〉という意味を持ち、〈Xと発話する〉に準ずる例とみて①に含めた。

(25) マコト ソロリコ ソロリコ チーン チーン φユーテ (ほんとうにソロリコソロリコチーンチーンといて、)[Kc4]

②呼び名の引用⁹⁾

対象に特定の名前・言語表現が割り当てられることを述べる場合。他動詞型「ZがYをXと言う」、自動詞型「YがXと言う」があり、前者は〈YをXと{名づける/呼ぶ/表現する}〉、後者は〈YがX(という名前を持つ/と呼ばれる/と表現される)〉という意味を持つ。後掲の複合辞化した「～と言う」のうち特に④と連続するが、ボイス・テンス等が分化しうる点で動詞としての性格を保持している。前掲(4)(8)(10)

(16) もこの例である。

- (26) レンシュースルコトオ マイオ ナラス φ
ユンデス。(練習することを「舞をナラス」と
いうのです。)[Hy3]

③接続助詞型複合辞¹⁰⁾

「～と言う」にテモ・タラ・トなどの接続形式が付き、全体で複合辞化した例。発話時や主体が特定できず、テンス等も分化しない。順接仮定型「～と | いったら / いえは / いうと |」あるいは、逆接仮定型「～と | いて (も) / いったって |」の固定した形で用いられる。

(28) のように、共通語の「～と | いったら / いえは / いうと |」では訳しにくい提題形式化したものを含む。

- (27) イッスンカク φ ユート イマノ ナニニ ナ
ンノカナ。(一寸角というのと今の何になるのかな。)
[A3]

- (28) キツネ φ ユータラ アタマオ コー アノー
タウエシタ ミズデナー, アタマオ コー
ト ナゼタラナ バケルンヤテー。(きつねと
いうのは、頭をこう、あの、田植えをした水でね、
頭をこうやってなげるとね、化けるんだって。)[Hy3]

- (29) ソーカト ユエテ ダレンマレ ヤレヨ φ ユ
タチ アレモ コーシャガ ナケリヤ ヤレ
ルモンチャナイ。(そうかと いって、誰にでもや
れよ 言ったって、あれも技巧がなければやれる
ものではない。)[Kc4]

④連体助詞型複合辞

「X という Y」という固定形で用いられ、X が呼び名 (名前・固定された言語表現)、Y がその呼ばれる対象という関係にある。② (呼び名の引用) の基本形連体法にあたるが、名付けの主体を全く問題にしない点、(30) のような呼び名の引用という意味も稀薄となり、類概念の総称的な叙述を行う拡張用法もある点で、「言う」の動詞としての性格が稀薄化し、「という」で複合辞化しているとみなして、②と区別した。Y が形式名詞「もの」「こと」「の」の例も含むが、助動詞相当の「ものだ」「のだ」「ようだ」等は除く。(32) のような感嘆の慣用句「なんという Y」も含む。(2)(9)(12) もこの例。

- (30) 人間 という のは厄介な生き物だ。[作例]

- (31) カミツキゾーリト ユエモノ オ ハイテイタガ (紙
つき草履 という のを履いて行ったが。)[Kc2]

- (32) ナン チュー マ ナサケナエ ノコリ ユ コッ
テゴザルマシタヤラー (なん という、まあ、情け
ない、名残り惜しいことでしたね。)[T1]

⑤その他の複合辞

「X と言う」由来の複合辞で③④以外。(33) や前掲(11) のような「という ような」、(34) のような伝聞

の助動詞相当、(35) のような提題助詞相当など、形・意味ともに多様だが各々が少ないので統合した。

- (33) タノンマッセ チュナ モンデスワナ。(「頼みま
すよ」というようなものですよ。)[Os2]

- (34) マコト アノ フーリンワ マヨケデ ツケタ
ト ユ チヤカ。(本当にあの風鈴は魔よけでつけた
というではないか。)[Kc4]

- (35) コドモノ ジブンノ アソビ φ ユ テナー, ダ
イナンカ ー, オンナノシトヤッタ ドナイナ
カ ー アッタン。(子供の頃の遊び って ねえ、どん
なのが、女の人だったら、どんなのがあったの。)[Hy3]

φ化の必要条件 (I) に該当する「～と言う」の例を①～⑤に分類したのが表4である。表4のφ化率を見ると、引用標識全体においてφ化率が高い兵庫・岡山・広島資料では①～⑤の区別とφ化率の相関が見出せないが、それ以外の地域では多くの地点において、① (発話の引用) でφ化率が高く、②～⑤、なかでも特に④ (連体助詞型複合辞) でφ化率が著しく低い傾向がある。

そこで、まず、談話IDごとに「①」「②～⑤の合計」×「φ」「φ以外」の2×2分割表に対して独立性の検定 (同前) を行ったところ、T4・Ky2・Os2・Kc4で1%水準の有意差、E3で5%水準の有意差が得られた¹¹⁾。これらはいずれも、まとまった数の引用標識の例が得られた『全国方言談話データベース』所収の談話である。また、『全国方言資料』所収のT2・Kc2でも10%水準の有意傾向が見られた。この検定結果は、地域を越えて①の場合にφ化しやすいことを示している。

次に、特に④においてφ化率が低くなることを確認するために、「②③の合計」「④」×「φ」「φ以外」の2×2分割表に対して独立性の検定 (同上) を行ったところ¹²⁾、T4・Kc4で1%水準の有意差、Os2で5%水準の有意差、Hy3で10%水準の有意傾向が得られた。ここでも、富山・近畿・高知という複数地点でφ化に関して同じ要因が存在することが確認できた。

なお、疑問語「ナン (何)」に引用標識が付く例が全資料を通じて6例ある。下の(36) のような②に分類される例がKy1・Ky2・Os2・Hy1に各1例、前掲(32) のような④の例がT1・Ty2に各1例ある。

- (36) C : ナ, ナン チュー ノ? D : ツルビエ C :
ツ ツルビエ φ ユ ノ。(「なん という の?」「つ
るびえ。」「つるえび という の。」)[Ky2]

これら6例は全て「ナンチュー」など縮約形で現れ、φの例はない。筆者や他の富山・広島方言話者の内省による判断では「ナンφユ」は許容できず、「ナン (何)」を承ける場合は極めてφ化しにくいと言って

表4 引用標識「φ」「有形」×「～と言う」①～⑤

φ 有形 計 φ%				φ 有形 計 φ%				φ 有形 計 φ%				φ 有形 計 φ%											
T1	①	0	7	7	0.0	Os2	①	24	16	40	60.0	Hr1	①	4	0	4	100.0	Kc1	①	0	6	6	0.0
	②	0	0	0	-		②	12	11	23	52.2		②	2	0	2	100.0		②	0	7	7	0.0
	③	2	2	4	50.0		③	5	4	9	55.6		③	0	0	0	-		③	2	3	5	40.0
	④	0	5	5	0.0		④	10	29	39	25.6		④	3	1	4	75.0		④	0	6	6	0.0
	⑤	0	3	3	0.0		⑤	0	13	13	0.0		⑤	2	0	2	100.0		⑤	0	0	0	-
	計	2	17	19	10.5		計	51	73	124	41.1		計	11	1	12	91.7		計	2	22	24	8.3
T2	①	2	5	7	28.6	Hy1	①	0	0	0	-	Hr2	①	7	1	8	87.5	Kc2	①	6	1	7	85.7
	②	0	6	6	0.0		②	3	1	4	75.0		②	0	0	0	-		②	1	1	2	50.0
	③	0	2	2	0.0		③	7	1	8	87.5		③	1	0	1	100.0		③	2	0	2	100.0
	④	0	6	6	0.0		④	3	2	5	60.0		④	0	0	0	-		④	2	7	9	22.2
	⑤	0	3	3	0.0		⑤	0	0	0	-		⑤	1	0	1	100.0		⑤	0	1	1	0.0
	計	2	22	24	8.3		計	13	4	17	76.5		計	9	1	10	90.0		計	11	10	21	52.4
T4	①	31	2	33	93.9	Hy2	①	8	4	12	66.7	Hr3	①	20	4	24	83.3	Kc3	①	11	0	11	100.0
	②	6	2	8	75.0		②	0	0	0	-		②	10	0	10	100.0		②	0	0	0	-
	③	3	3	6	50.0		③	0	0	0	-		③	11	0	11	100.0		③	2	0	2	100.0
	④	2	13	15	13.3		④	1	0	1	100.0		④	16	0	16	100.0		④	1	1	2	50.0
	⑤	2	1	3	66.7		⑤	0	0	0	-		⑤	4	0	4	100.0		⑤	0	0	0	-
	計	44	21	65	67.7		計	9	4	13	69.2		計	61	4	65	93.8		計	14	1	15	93.3
Ky1	①	1	1	2	50.0	Hy3	①	42	5	47	89.4	E1	①	2	1	3	66.7	Kc4	①	22	9	31	71.0
	②	0	3	3	0.0		②	14	0	14	100.0		②	3	1	4	75.0		②	9	10	19	47.4
	③	1	6	7	14.3		③	18	0	18	100.0		③	0	1	1	0.0		③	12	9	21	57.1
	④	0	6	6	0.0		④	25	3	28	89.3		④	6	7	13	46.2		④	4	40	44	9.1
	⑤	0	5	5	0.0		⑤	7	4	11	63.6		⑤	0	2	2	0.0		⑤	2	16	18	11.1
	計	2	21	23	8.7		計	106	12	118	89.8		計	11	12	23	47.8		計	49	84	133	36.8
Ky2	①	4	1	5	80.0	Ok1	①	8	1	9	88.9	E2	①	3	1	4	75.0						
	②	2	9	11	18.2		②	1	0	1	100.0		②	0	0	0	-						
	③	2	4	6	33.3		③	1	0	1	100.0		③	2	0	2	100.0						
	④	1	11	12	8.3		④	3	0	3	100.0		④	2	4	6	33.3						
	⑤	0	6	6	0.0		⑤	1	0	1	100.0		⑤	0	0	0	-						
	計	9	31	40	22.5		計	14	1	15	93.3		計	7	5	12	58.3						
Os1	①	11	0	11	100.0	Ok2	①	43	6	49	87.8	E3	①	43	1	44	97.7						
	②	2	1	3	66.7		②	4	0	4	100.0		②	13	0	13	100.0						
	③	1	0	1	100.0		③	9	0	9	100.0		③	4	2	6	66.7						
	④	1	1	2	50.0		④	16	1	17	94.1		④	16	4	20	80.0						
	⑤	0	0	0	-		⑤	0	0	0	-		⑤	0	0	0	-						
	計	15	2	17	88.2		計	72	7	79	91.1		計	76	7	83	91.6						

よいだろう。

4-4. まとめ

φ化の頻度と言語内的要因に関する調査結果の要点を以下に示す。

- 引用標識のφ化が起こるのは、先行研究の指摘どおり、引用句を承ける動詞が「言う」か「思う」で、かつ引用句と動詞との間に他の語句が介在しない統語環境に限られる。なお、京阪地域では「言う」の語彙的謙譲動詞「申す」でφ化した例もあった。
- 兵庫南部・岡山・広島の本州瀬戸内沿岸で特にφ化率が高い。
- 引用句を承ける動詞が「言う」のほうが「思う」よりもφ化しやすい。ただし、引用標識全体におけるφ化率が高いと、この要因は顕現しない。
- 述語動詞が「言う」の場合、〈発話の引用〉でφ化しやすく、〈呼び名の引用〉や複合辞化した場合はφ化率が劣る。特に名詞型複合辞「XというY」で著しくφ化率が低い。ただし、この要因も引用標識全体でφ化率が高いと顕現しない。

- 疑問語「ナン（何）」に引用標識が付く場合は、極めてφ化しにくい。

5. 考察—φ化の動機—

前節で見出したφ化頻度の言語内的要因は、北陸・近畿・四国という連続しない複数地域に共通して関与している。このことは、これらの要因が何らかの言語内的な動機に基づくことを示唆する。本稿ではこれを《引用標識の機能負担》という観点から考えてみる。

φ化の頻度に関わる要因 (b) 「～と言う」の意味・複合辞化、特に「～と言う」が〈発話の引用〉の場合に最もφ化しやすいという点は、この観点から説明しやすい。発話内容の引用文では、「太郎が『もう {行け/行くね/行くの?}』と言った」のように、引用句以外の連用修飾語句では現れないモダリティ形式や終助詞等が引用内容部分末尾（引用標識の直前）に位置することが多い。また、発話内容の引用部分は、いわゆる「声色」など「地」の文とは異なるパラ言語

的特徴を伴うこともある。このように、引用部分が個別的な出来事としての発話の再現である場合、特にもとの発話の再現性が高いほど、引用標識に拠らずにそれが引用句だという統語分析・発話の解釈がしやすくなる、つまり、引用標識の機能負担が軽くなる。一方、〈呼び名の引用〉の場合や複合辞の場合には、そうした引用部分と地の部分とのレベル差がなく、特別なパラ言語的特徴を伴うことはない¹³⁾。また、人名など有生名詞が引用部分に位置する場合は、述語動詞「言う」の動作主体と引用句の弁別のために有形の引用標識が機能することになる。4.1で見たように、引用標識のφ化が起ころとも「低接」という韻律特徴は保たれるので、それによって格成分が引用句かが弁別できることもあるが、引用部分の語句が有核（特に尾高）の場合にはその弁別性は失われてしまう。

要因(a)の「～と言う」が「～と思う」よりφ化しやすいという点も同様に説明可能である。「～と言う」、特に上で見たような〈発話の引用〉は、引用部分が音声という物理的な形を伴うものの再現であるが、「～と思う」が引用する思考内容は、そのような形を持たない。また、発話内容の場合に比べ思考内容の引用部分末尾には特別なモダリティ形式が来ることが少ないと思われる。そのため「～と思う」では発話の引用の「～と言う」に比べ、有形の引用標識が機能する。なお、高永(1988, 1996)は、「～と思う」は丁寧体になることが多いことから、発話のスタイル差の違いに還元できるとしているが、今回の談話資料では特に「思う」が丁寧体に偏るということではなく、発話のスタイル差には還元できないと考える。

ただし、複合辞のなかでも連体助詞型「XというY」で著しくφ化率が低いことは、機能負担という観点からは説明しにくい。この点は、連体助詞型複合辞「～という」が、「～といっても」等の接続助詞型複合辞に比べ語形が短いことも関わるかもしれない。連体型でφ化が起こったときの形「ユー」は、一音節と短く、かつ、半子音・母音のみから成るために前接語と融合・縮約しやすい。そこで、複合辞としての語形を保持すべく、φ化を避けて、「トユー」や、縮約のみが起こった「チュー」「ツ」等が用いられやすいと考えられる。

また、疑問語「ナン」を承ける場合にφ化が極めて起こりにくいのは、撥音/N/に半子音+母音拍/ju/が続くのを回避するという音素配列上の動機によるものだろう。ただし、筆者を含む富山・広島方言話者(同前)の内省では「ホン(本)」など撥音を末尾に持つ他の語句を承ける場合はφ化が可能で、今回の調査でも前掲の例(1)のような例が見出せる。「ナ

ン」の場合、もともとは量的にφ化が起こりにくかったのだろうが、すでに「ナントユー」「ナンチュー」などの形で慣用化・固定化されていると言える。

6. まとめと残された課題

以上、本稿では西日本方言談話資料の用例調査を主に、筆者の内省や方言話者を対象とした面接調査の結果を副次的に用いながら、引用標識のφ化の生起頻度の地域差と言語内的要因を明らかにするとともに、その言語内的要因を動機づけるものについて考察した。生起頻度の地域差についても、頻度に関わる言語内的要因についても、母方言話者の内省に依拠する質的な調査から見出すことは困難で、談話資料の用例の定量分析という本研究のとった方法は、この課題に合致していたと言える。

繰り返し述べてきたように、西日本諸方言の引用標識のφ化には、引用句に動詞「言う」「思う」が直接後続する環境でのみ起こるという厳しい生起制限がある。これに対し、格助詞ヲ・ガ・ニのφ化(脱落)においては、少数の述語動詞に限って起こるという制限も、副助詞や他の成分が介在しえないという制限もない。この点で、引用標識のφ化は、格助詞のφ化とは異質である。この異質性は、引用句「～」は基本的・本来的に副詞的成分であるとする藤田(2000)の立場と整合する。また、動詞が「言う」「思う」に限られるのは、この二つがそれぞれ発話・思考内容を引用する構文の述語動詞として代表的なものであることに関わるだろう。しかし「～と言う」「～と思う」が引用構文の代表というだけでは、φ化がこの二つに限られるという厳密な制限が通方的に存在することの説明としては不十分と思える。この点については稿を改めて考えたい。

【注】

- 1) 瀬戸内海沿岸地域のφの分布は『瀬戸内海言語図巻』(藤原他 1974)第21・22図「人というものは」でも確認できる。
- 2) 筆者は1973年生。0～18歳、富山市田畑新町在住。その後は神奈川県、東京都、広島県在住。
- 3) 朝日は、同じデータを分析した最初の論考(朝日2003)において、ニュータウンでは主節より連用従属節でφが多いことを示し、「発話の始めと終わりに払われる注意度」の違いによるとしたが、後の論考(朝日2008)でこの観点を放棄している。本稿でも、発話の位置による注意度の差がφ化を左右

するとは考えにくく、また、主節／従属節という統語環境の差は要因 (b) から説明できると考え、分析の観点としない。

- 4) GAJ ではほかに三重県や島根県などにも ϕ がある。
- 5) 談話資料の例を示す際、分かち書き・共通語訳は私的に改め、言い淀みや聞き手のあいづち部分は略した。また、必要に応じて引用標識や述語部分に下線を付し、 ϕ 化した例では ϕ を補う。
- 6) 縮約形「チューテ」も出現しておかしくないが今回の資料には確かな例がなかった。なお、引用標識としての「(ト) ユーテ」については別稿で詳述したい。
- 7) T4にも、引用の「と」相当の「トモテ」がある旨の注があるが (p.88)、音声から言い淀みと判断した。
- 8) JavaScript-STAR8,ver.5.5.4j (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/2x2.htm>) を利用した。
- 9) 藤田 (2000) の用語と記述に大きく拠っている。
- 10) 分類③～⑤を通じて「～と言う」由来の複合辞の認定については藤田 (2000: 第4章) や砂川 (2006a, 2006b) を参考にした。
- 11) ①のほうが ϕ 化率が低い Hr3でも 5%水準の有意差が得られた。Hr3の①で ϕ 以外の引用標識は「ッテ」1例、「ユエテ」3例。「ッテ」「(ト) ユエテ」は他の地点でも①が多く、この検定結果は「ッテ」「(ト) ユエテ」が①で用いられやすいことを示すと解釈できる。
- 12) ⑤には、性質の異なるさまざまな例が含まれるため、ここでは除外した。
- 13) 引用表現の基本を「所与のコトバの再現」とみなす点や、典型的な引用表現と複合辞化した場合との違いなど、この部分の記述は藤田 (2000) に大きく拠っている。

【引用文献】

- 朝日祥之 (2003) 「方言接触が生み出した言語変種に見られる言語的特徴—引用形式「ト」のゼロマーク化を例に—」『阪大日本語研究』15
- 朝日祥之 (2008) 『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房
- 井上優 (2003) 「方言のしくみ 文法 (語法・意味)」小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図 第1集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (2001-2007) 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』第10, 11, 13-15, 17巻, 国書刊行会
- 国立国語研究所編 (2002) 『方言文法全国地図 第5集』財務省印刷局
- 砂川有里子 (2006a) 「言う」を用いた慣用表現—複合辞の意味記述を中心に— 倉島節尚編『日本語辞書学の構築』おうふう
- 砂川有里子 (2006b) 「言う」を用いた複合辞—文法化の重層性に着目して— 藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院
- 高永 茂 (1983) 「広島県宮島方言の「ト抜け」に関する社会言語学的考察」『日本方言研究会第42回研究発表会発表原稿集』
- 高永 茂 (1996) 『都市化する地域社会の社会言語学的研究』溪水社
- 日本放送協会編 (1999) 『CD-ROM 版 全国方言資料全12巻』日本放送出版協会 (ソノシート版は1959～1976年刊)
- 福田 稔 (2000) 「地域方言における補文標識省略」『帝塚山学院大学人間文学部研究年報』2
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤原与一・広島方言研究所 (1974) 『瀬戸内海言語図巻』東京大学出版会
- 前田 勇 (1977) 『大阪弁』朝日新聞社

【付 記】

本稿は、広島大学国語国文学会 (2007年11月)、広島・方言研究会 (2008年6月) での発表内容を新たに調査結果を補って書き改めたものである。発表時にご意見を下さった諸氏、および富山・広島方言の面接調査のインフォーマントに御礼申し上げる。本稿は科学研究費補助金基盤研究 (B) 課題番号21320086、および若手研究 (C) 課題番号19720107による成果の一部である。